

白百合幼児学園創立五四周年感謝月間によせて
食卓を囲む

牧師 島田勝彦

「妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。
食卓を囲む子らは、オリーブの若木。」
マルコによる福音書1:15

表題のみことばは、現代のわたしたちが読むと、封建的な家族のイメージを抱くかも知れません。しかし、聖書はいつの時代にも共通する真理を教えていますから、無碍にこれを退けるわけに参りません。少なからず、家庭とは何か、それぞれの役割と意味を持って一つとされている家族について、わたしたちが忘れてはならない目標を示しているのではないのでしょうか。詩人は歌います。エルサレム、国家の再建と繁栄の基盤が家庭の祝福にあり、家庭の祝福の基盤は、「食卓を囲む」ことにある、と。

この50年を振り返ってみますと、戦争に明け暮れていた日常が何とか落ち着きを取り戻し、復興の兆しが見え始めた時代でした。古いものを引きずりながら政治も経済も教育も暗中模索の中でありましたが、少しずつ新しい日本の自信が付き始めた頃ではなかったのでしょうか。70年代、80年代は高度経済成長に邁進し、世界を凌駕するような国になったことを誇っていたかと思えます。しかしその後、掲げられた数字の中身がないことに気づかされ、いわゆるバブルと称される破綻、世界恐慌を引き起こすような経済失速状態に陥りました。いつの間にか心を失った豊かさは、身の回り借金だらけの大国となり、地球大の自然破壊を生み出し、社会を形成する人間の有り様が病的になってきました。教育の破綻にもつながってきたのです。物質的豊かさが、必ずしも人間にとって幸せとは限らない答が出されました。

50年、いや、何年経っても子どもたちの本質は変わらないかも知れません。しかし、200名を越える教会学校の子どものためにと、教育館を建設し、週日は保育活動をもって地域近隣の宣教活動に供してきた白百合幼児学園においても、子どもたちへの対応はずいぶん変化してきたのではないのでしょうか。

今わたしたちが迎える子どもたちは、その両親となるおおかたの世代が高度経済成長期、ないしは経済破綻の兆候が見え始め不安な状態の中に生まれ育った方々です。振り返ってみれば、本来の家庭が崩壊しはじめ、十分親子関係が営まれないなかで過ごされた世代ではなかったのでしょうか。

経済重視の社会は、まずそれぞれの家庭から父親を奪いました。人格教育よりも英才教育、学歴社会を築きました。学校教育だけでは済まなくなったのです。また、合理化を追求する余り、時間、労力をかけるよりも、即席で、表面的な生活になりました。そのために時間が有り余るどころか、かえって忙しくなって、勢い過程よりも結果重視になってきたのです。

今日の、少子化、家庭の喪失、子育ての混乱、人格的規範の多様化などは、こうした背景のなかで醸成されてしまったのではないのでしょうか。一言で言えば、家庭の崩壊がもたらした結果です。

家庭の崩壊とは食卓の崩壊です。かつてのように、家族がそろってひとつの食卓を囲む場面が少なくなってきました。食卓に着く時間が同じ屋根の下でもみなバラバラ。それぞれが口にする内容も各自。「同じ釜の飯」どころか、母親の味が無い食卓が増えて来ました。食事中、食べること、ひとつ命を共有する最も大切な時間が、新聞を見ながらのお父さんどころか、全員がテレビを見ながらの片手間になってきたこと。家族が育ちません。子どもが育ちません。子どもを育てることのできる大人が育たないのです。

教会がなぜ教会であるか。週の初め毎に礼拝を守り続けているからです。礼拝はいのちの糧を得る食卓です。そこに集う者がなにゆえ「神の家族」と称されるのか。食卓の主が用意くださる礼拝に共に与るからです。しかもそれぞれの教会が公同性を持ちながらも、それぞれの教派、教団、教会があるのは礼拝という食卓の個性があるからです。これをないがしろにしては教会という家族が育ちません。自分の好み次第のつまみ食いでは、次の家庭を築くことのできる家族が成長しないからです。

わたしたちの大きな課題です。教育の現場でも、これをどう修正できるか、大きな課題です。自家製給食に徹する白百合幼児学園のさらなる前進を願ってやみません。